国際熊野学会
会報
Issue 44
発行　国際熊野学会
熊野事務局
発行年月日
2025年9月1日

名取老女に魅せられて

国際熊野学会代表委員　山本殖生

【交流のいきさつ】

宮城県名取市を初めて訪ねたのはもう四十年ほど前になる。

不動の滝（那智の滝・那智神社の南西）

名取熊野三社（本宮・新宮・那智）が祀られ、今もその信仰が息づいており、那智の滝までである。そして何と言っても名取老女四十八度熊野参詣伝承があることにびっくりした。

以来、市民ぐるみの交流を積み重ね、新宮市議会の注力もあり、平成二十年にはそうした絆を礎に、名取市・新宮市の姉妹都市縁組みも実現した。

名取市郷土史研究会と熊野歴史研究会との相互探訪交流など、研究者の間でも関心が高まっている。

幸いにも、名取市史編さん事業が始まり、熊野との関係が重要視される中で、今回、国際熊野学会創立二十周年を記念して、名取市にお世話になり、シンポジウムを開催することになった。ここに名取市との絆の根幹である「名取老女」を振り返り、両市と国際熊野学会の益々の発展と弥栄を祈念したいと思う。

【名取老女伝承】

名取市高館の熊野神社には、名取老女伝承を記す「縁起」が伝えられているが、そのうちの一本、永正二年（一五〇五）の年記を持つ『熊野堂縁起』を基に、その梗概を紹介しておきたい。

昔、名取郡に一人の巫女がいた。この巫女は深く熊野権現を信仰し、毎年、紀州熊野への参詣を怠っていなかったが、年老いて長旅が不可能になった。そこで、保安四年（一一二三）、名取に熊野三山を私に遷し礼拝していた。

一方、保延年中（一一三五～一一四〇）に陸奥下向の志を持つ熊野山の山伏が本宮証誠殿に通夜したところ、「陸奥に下るのなら、名取に寄ってそこの老女にある物を渡してくれ」という霊夢を蒙る。眼覚めて枕元を見ると、梛の葉に

「みちとをし
としもいつしかおいにけり
おもいおこせよ
われもわすれじ」

という虫食いの神詠があった。

山伏は急いで名取に下る。老女に会ってその霊夢のことを伝えると、老女は感激の涙を流し、山伏をこの地に勧請した熊野三社に案内した。山伏は老女の深い信仰心に心打たれ、老女に熊野権現の神慮を涼しめるために、臨時の幣帛を捧げることを勧めた。老女は祭文を唱え幣帛を捧げると、熊野権現の使者である護法善神が影向し老女を祝福したという。

この縁起の奥書に「神人権大夫友明続古昔縁起書之」とある。安永二年（一七七二）四月に提出された『熊野堂村熊野三山古跡書上』には、「永正二年乙丑六月紀州本宮神人渕上権太夫先祖神人権太夫友明書之」とあり、熊野本宮の渕上氏との関わりが注目される。